

□ 書 評 □

「核 医 学 改訂第3版」

—ラジオアイソトープによる診療—

〔共著〕安 河 内 浩・木 下 文 雄

千葉大学教授

有 水 昇

現代社会は情報量が非常に豊富であり、かつその内容も速やかに進歩する。このような社会での得な学習方法は、豊富な情報の中から必要情報を選び出すことに努力するよりも、エッセンスとして情報を得て、これを速やかに自己の頭脳に消化吸収することであろう。

とくに医学生は、講義から臨床実習に、卒業試験から国家試験へと、息つく暇もないほど、医学知識の新しい修得に追まわられているためか、修得すべきエッセンスのみを理解しやすい内容として盛り込んでいる学習書を求める傾向である。

本書は、核医学に関して医学生のみならず卒後研修生が必要とするエッセンスのみをそのまま要領よく記述したものであり、小冊子との制限からか、いわば派生的な内容はできる限り省略している。したがって能

率よく最近の核医学を修得する目的に本書は最適である。いいかえるならば、小冊子ではあるが、本書の内容を理解し覚えておれば、医大生のみならず卒後研修生として修得すべき核医学は必要にして十分であるといえよう。

放射線医学は、X線診断、放射線治療および核医学の3つに細分化されており、それぞれの内容は程度の差こそあれ膨大なものとなっている。放射線医学書として全体を1冊にまとめた分厚な書籍が出版されているが、核医学に関する限り、残念ながらお粗雑の感があり、学生の教育用としても内容的に不十分な面が多い。また、基礎的な面または検査技術を重視するあまり、臨床的内容を薄く取り扱っている図書もある。理論に走り過ぎ、実際の臨床には余り役立たないものもある。逆に

臨床例のみに羅列した専門書もある。これらは核医学専門家にとっては有用と考えるが、医学生および卒業後研修生には全般を理解するだけでも大変な時間を要するであろう。

本書は小冊子ではあるが核医学の全分野にわたり、偏重することなく要領よく、内容をわかりやすい形で記述している。進歩の急速な核医学については、4～5年もたてば隔世の感を受けるとしても過言ではない。本書が4～5年毎に改訂を行ない、常に最近の核医学の内容を盛り込んでいる点を高く評価すると共に核医学専門家にとっても一読に価する斬新な内容の多いことを強調したい。しかし本書を読破した後、もしも核医学を専攻するのであれば、実際の診療に則し専門的な内容の書籍を改めて読む必要のあることはいうまでもない。

著者の安河内、木下両氏共にわが国における核医学の発展と共に歩んできた練達の臨床家である。往時の青年学者はすでに初老の域を越えつつあり円熟味を増している。今後とも本書が4～5年毎に改訂を重ね、医学生および研修医の核医学教育に貢献することを念じたい。

A 5 / 頁322 / 図100 / 写真112 / 原色図4 /
¥3,800 / 〒200 / 医学書院刊